

よさこい前夜

よさこい踊り。高知で始まり、北海道経由で全国に広がったダンス。地域の祭や、運動会の種目として取り入れられ、「よさこい」は全国の民俗文化になったようです。孤島の南大東島にもチームがあると聞いた時にはびっくりしました。

ご承知のように、よさこい踊りは自由度の高い踊りです。鳴子をもつこと、よさこい節を二小節は入れること。後は、何をやってもOK。参加者の工夫と想像力次第。よさこい節の作曲者、武政英策が著作権を放棄し、自由な編曲を可能にしたことで、それが可能になったと言われています。有季定型だけをルールとして、自由な表現の土台をつくった俳句と、よさこいの成り立ちとは共通点を感じます。多くの中高年が俳句を楽しむように、若者の多くがよさこいでの表現を楽しんでいるように思えます。

よさこい踊りの各チームは100人近い人数となります。職場のチーム、地域のチーム、学校のチームなどいろいろなチームがあります。ビデオでしか見ていませんが、飲み屋街のお姉さん達のチームもあるそうです。さまざまなチームが地方車、歌い手、演奏者、踊り手を抱えます。大集団と大音量、派手な衣装で街を踊り進む迫力は、筆者には婆娑羅の

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲練習風景

世界と感じられ、引き込まれる魅力があります。

今夏、よさこい祭りの前々日に高知を訪ねました。帯屋町、大橋通りの商店街チームの練習風景を見ることを期待していました。2つの商店街は、56回目の参加ですから、よさこい踊りの歴史を刻んできたチームといっぴよいでしょう。

20時過ぎに商店街に行くと、期待どおりの練習をやっていました。商店街の子供、お父さん、それを取り巻くお母さん。お爺ちゃんやお婆ちゃんも。大旗を掲げ、歌に合わせて順に50メートルほど進み、先頭に立つと、列の後ろに戻って練習を繰り返します。大橋通りでは、お客様へのお礼を踊りのなかで大声で叫び、頭を下げる振り付けがあります。帯屋町では、若い人に交じり、筆者と同世代の方が激しい踊りに挑戦されていました。

営業が終わった商店街。いつもはお客様のための街路が住民達の練習場に変わっていました。制約によって保障された自由な表現。多様性を生み出す工夫が、そこに感じられました。

(MBO実践支援センター代表)